

# 死者の書

「死者の書」のあらすじと音楽美

三 隅 治 雄

折口信夫の『死者の書』は、日本近代文学史を飾る歴史小説です。宗教・民俗の色濃い幻想的な内容は一読では難解ですが、今藤政太郎師は、音声・擬音・擬声が醸し出す叙述の音楽性の凄さに感応したと仰いました。

原作の主舞台は、平城京の西北方、河内との国境にそびえる二上山。山脈やまなみに沈む夕日の輝きが遙か西方の阿弥陀の浄土への憧憬を誘います。山麓まんほうぞういんに万法蔵院（当麻寺）と古堂があり、その寺域に、春分の夜、藤原豊成の息女郎いらつめ女が迷い込んだことから騒動が起きました。姫の失踪を神隠しかと当麻たぎまの氏人が姫の魂を呼び戻す呪文を唱え、それが何と二上山上に埋葬された天武天皇の御子おおつのみこ大津皇子の魂を甦たぎまらせました。皇子は、謀反の罪で処刑される寸前に見た豊成の曾祖父藤原不比等ふひとの妹君への愛執が失せず、藤家血筋とうけの郎女に依り憑いて「吾が子を産んでくれ」と叫びます。

小説は、この皇子の甦たぎまりの描写から始まりますが、知る由もない郎女は、かねて父から与えられた称賛しよふん浄土じよつど仏ぶつ撰せん受じゆ経きやうの千部手せんぶて写しやを発願して日を重ねるうち、去年の春秋の彼岸ひがん中日ちゆうじつに二上山

に莊嚴な佛びとの立つのを幻視し、今日もまた拜めるかと願ったが降雨で成らず、焦燥に駆られるまま寺域に踏み入った。驚いた寺では女人禁制を咎めて古堂に籠らせ、罪の贖あがないをさせます。暗い堂内では、語部かたりべの媪おきなが郎女に語ります。藤原の系譜のこと、二上山との関わり、そして大津皇子の怨念が郎女に依り憑いた因縁を語り、さらに天若日子あめわかひこなる神が、神代の昔から貴い娘御の閨まで忍び寄る伝えのあることも語ります。郎女は、私の見る佛びとは誰？と惑い、しかし、日夜山を見続けます。

ある夜郎女は閨ねやを訪れる足音を耳にし、帷帳とばりを開く白い指、その指が海の渚の白玉となり、それを海中に拾ううちに一つに溶ける夢を見ます。目覚めると、水面に射す月光の中に佛びとの淨い目眉、白い肌が浮かび、思わず阿弥陀仏の御名を口にします。

以来、かの足音を待つ夜を重ね、佛びとの御肌に衣をと念じるうち、秋分中日、暴風に遭いつつ寺の門前に立ち、素肌の佛びとのお姿を鮮明に拝します。「お寒かろう」と想う郎女を、またも神隠しかと侍女たちは慄き、弓を鳴らし、あっしあっしと反閨へんばいを踏みました。郎女はただ佛びとに御衣をと、ちようちよう、はた、はたと機を織る。箴おさの齒が折れて進まぬ焦りを、語部の媪が助言し誘導して織り終えさせます。出来た大衣に郎女はみずから彩色し、にこやかな笑みを残して古堂を去りました。郎女が描いたのは一人の佛びとですが、人々の眼には数千の地湧ぢゆの菩薩の姿が周りに浮かび上がります。

語部が紡ぎ出す音楽性横溢の小説。イタリアの宗教音楽劇オラトリオが連想されますが、名人今藤師の名曲誕生がたのしみです。

### 脚色者より

『死者の書』脚色の大役を及ばず乍ら勤めさせていただき、いまだに緊張しております。

元々が内部に独特な音楽性を十分に含む文学作品です。しかもページを開くなり迫ってくる文字と音とに幻惑され、それはいつまでも張り付いて、読んでいて身動きがとれなくなり、その『死者の書』を「音楽」にする難しさは様々ありましようが今回の場合、音楽にする以前の根本的なところ、つまり仏教やさまざまな土俗的信仰など異なる文化・文脈が何層にも重なりあう中で交感に至った大津（の魂）と郎女の関係をどう捉えるか、に尽きました。

ですが、「これは時空を超えた恋なのだ」という政太郎師の強い思いがあり、このように大勢の演奏家、作曲家や制作者が集まりました。さながら郎女の曼茶羅のごとく音楽が縦横に綴り上げられホールに響き渡ることを願っております。

（金子 泰）